

A01r 木曾シュミット望遠鏡によるサイエンスと木曾観測所の現状・将来

小林尚人、青木 勉、征矢野 隆夫、樽沢 賢一、三戸 洋之、猿楽 祐樹、田中 由美子、宮田 隆志、中田 好一、土居 守(東京大学)

東京大学木曾観測所は1974年の設立以来、日本の天文コミュニティの共同利用研究機関として運営されてきた。口径1.05mのシュミット望遠鏡を擁し、初期の乾板による観測をはじめ、現在のCCDカメラによる広視野撮像まで、最大6度角の広視野を活かした様々なサイエンスをすすめてきた。安定かつこなれた運用を実現し、日本の光赤外コミュニティの重要な施設としてその存在価値は変わらないが、現在の大型望遠鏡時代においてその役目は大きく変わりつつある。

木曾観測所では、1)時間が豊富で機動力にとむ中小口径望遠鏡の特徴を活かした「観測所サイエンスプログラム」や、2)次期主力装置となる「8K広視野モザイクカメラ(KWFC)」など独自装置の開発をすすめると同時に、国内にあるメリットを活かし、3)アイデアから観測までのリードタイムがなるべく短い研究を可能とする「ショートプログラム」を導入し、大学院生や可視光観測の経験のない他分野の研究者に広く光学赤外線観測を知って貰う役割を担い、4)学部教育やアウトリーチに大きな力を入れる(三戸他による講演を参照)、という方針で活動をすすめている。

本講演では上記の活動を紹介するとともに、とくに教育的観点から国内の観測施設の重要性を強調する。それをもとに、国内の数多くの中小口径望遠鏡や大学における研究グループとのさまざまな連携の可能性について議論したい。